

論 説

M・オークショットの伝統論

—— F・A・ハイエク,
A・マッキンタイアとの比較検討——

土 井 崇 弘

目 次

はじめに

第一章 オークショットの近代合理主義批判——啓蒙主義的合理
主義批判と伝統重視

第二章 行為の伝統——オークショットの伝統観

第三章 伝統の発展

むすびにかえて

はじめに

本稿の目的は、M・オークショットの伝統論の特徴を明らかにすることにある。その際にまず注意しなければならないのは、オークショットの議論は、法哲学・政治哲学の領域において通常使用されているいかなる分類にも、容易には当てはまらないという点である。⁽¹⁾とりわけ、J・ロールズの『正義論』登場以降のリベラリズムをめぐる議論状況を前提

とする場合には、オークショットの議論をいずれかの陣営——例えば、平等主義的リベラリズム、リバタリアニズム、共同体論など——に分類することは、極めて困難である。⁽²⁾

このようなオークショットの議論を検討するに際して、どのような問題設定を行うことが適切か。ここで筆者は、F・A・ハイエクとA・マッキンタイアの議論に着目する。というのもオークショットの議論と、ハイエクおよびマッキンタイアの議論との間には、以下に挙げる二つの重要な共通点が存在するからである。それは第一に、オークショット、ハイエク、マッキンタイアの議論はいずれも、ロールズ以降のリベラリズムをめぐる議論状況を前提とする分類のみに従うかぎり、各々の議論の特徴を十分に捉えきれないという点、第二に、各々の論者はいずれも、啓蒙主義的合理主義——すなわち、いかなる歴史的・社会的・文化的特殊性からも独立した観点に基づいて、社会制度を設計したり正義原理や行為規範を正当化しようとする考え方——を批判して、「伝統」の重要性を強調するという点にまとめることができる。⁽³⁾

そこで本稿では、オークショットの伝統論について、ハイエクおよびマッキンタイアの伝統論と比較しつつ、以下の順で検討を加える。まず始めに第一章で、「オークショットは、近代合理主義批判というかたちで啓蒙主義的合理主義を批判して、『伝統』の重要性を強調する」という点を指摘し、オークショット、ハイエク、マッキンタイアの共通点を確認する。もっとも、伝統に言及する際の伝統観や伝統の発展についての見解をめぐっては、オークショットとハイエクの間には微妙な相違が、オークショットとマッキンタイアの間にはかなりの相違が存在する。そこで第二章、第三章において、以上の論点をめぐるオークショットの議論とハイエクおよびマッキンタイアの議論との比較検討を行い、オークショットの伝統論の特徴を明らかにしたい。

第一章 オークショットの近代合理主義批判——啓蒙主義的合理主義批判と伝統重視

オークショット、ハイエク、マッキンタイアは、いずれも、「伝統」重視の立場に基づく啓蒙主義的合理主義批判を展開する。ハイエクにおける啓蒙主義的合理主義批判は彼の構成主義批判に、マッキンタイアにおける啓蒙主義的合理主義批判は彼の啓蒙主義批判に、それぞれ見出すことができる。⁽⁴⁾ オークショットの場合、近代合理主義批判というかたちで啓蒙主義的合理主義を批判して、「伝統」の重要性を強調している。

オークショットによれば、近代合理主義とは、あらゆる場合における精神の独立と、理性以外のいかなる権威にも従属しない自由な思考とを支持する考え方である。それは、物事の価値、意見の真理、行為の妥当性といったことを決定する理性の力を決して疑わず、すべての人間に共通する理性の力——すなわち、議論の基礎であり源である、あらゆる人間が共通して有する合理的な考察力——を強く信じている。したがってオークショットの指摘によると、近代合理主義は、権威や、偏見や、単に伝統的・習慣的な事柄を完全に否定する。単に存在するというだけでは、たとえ何世代にもわたって存在してきたとしても、何の価値もないと考えるからである。近代合理主義の立場からすると、現在行われている手段を受け入れてそれを修正し改善するよりは、それを破壊して全く新しい手段を一から創造するほうが、ずっと好ましいのである。⁽⁵⁾ オークショットは、知識論・行為論・道徳論・政治論を展開する中で、以上のような近代合理主義の主張を批判して、「伝統」重視の立場を提示する。

まず始めに、彼の知識論について。オークショットの考えによれば、あらゆる人間の活動に関わる知識は、技術知と実践知・伝統知との二種類に分類できる。技術知とは、ルール・原理・指図・格率のような命題のかたちで正確に定式化でき、したがって書物から学ぶことのできる、明確に意識化された知識である。これに対して実践知・伝統知とは、正確な定式化が不可能であって、慣行や実践の中で表現されその中でのみ

存在し得る知識である。したがって、実践知・伝統知を教えたり学んだりすることは不可能であって、それを伝えたり習得したりすることだけが可能である。だがオークショットによると、近代合理主義は、技術知のみを知識と認め、「知識の習得とは、全くの無知から出発して、確実かつ完全な知識に到達することだ」と考える⁽⁶⁾。そこで彼は、このような近代合理主義の知識観は誤りだ、と批判する。知識の習得とは、完全な無知からの脱却ではなく、既にそこにある伝統的知識の修正・改良だからである⁽⁷⁾。それゆえオークショットの主張によれば、人間の活動に関わる知識は「伝統」の存在を前提としなければならない⁽⁸⁾。

次に、彼の行為論について。オークショットによると、近代合理主義の下では、合理的な活動とは、追求されるべき目的を予め厳密に定式化して、その目的の達成を自覚的に追求する活動だと考えられている。だが彼は、「合理的な活動についてのこのような考え方は間違いであり、人間の行動を誤って記述している」と批判する。合理的な行動についてこのように理解することは、単に望ましくないだけではなく実際不可能であり、したがって、このような理解に適合する行動の明確な例を示すことも不可能だからである⁽⁹⁾。オークショットの主張によれば、①人間が特定の目的を追求する際には、その人間の行為は、予め設定された目的だけでなく、その目的追求の計画が属している活動の伝統によっても決定されるのであり、さらにいえば、②活動それ自体の前に活動の目的を計画することは不可能であって、特定の行為は活動の伝統の中で開始するのである。人間は、行為に関する「伝統」の枠内でしか行為できない⁽¹⁰⁾。

さらに、オークショットの道德論について。彼によると、近代合理主義が想定するのは、「道德的な生活は、道德的基準の反省的適用によってもたらされる」という考え方である。それは、道德的理想の自覚的追求と道德的ルールの子省的遵守とをその内容とする、理想の道德である。だがオークショットは、「このような理想の道德は、道德的習慣——それは、習慣的にあるやり方で行動している人々と共に生活する中で体得

する、行為の習慣である——それ自体を掘り崩す可能性がある」と、厳しく批判する。道徳的生活に安定性を与えるのは、反省的な思考の習慣ではなく、感情と行為の習慣だからである。⁽¹¹⁾彼の主張によると、道徳的な生活がもたらされるためには、我々は、自身が育ってきた行為の伝統に無反省的に従う以外にないという場合さえも、時には存在するのである。⁽¹²⁾

最後に、オークショットの政治論について。彼によると、政治とは、あるひとまとまりの人間集団を秩序化する、一般的取り決めに関わる活動である。この点に関して彼は、次の二点に注意を喚起する。第一に、政治という活動は、一般的取り決めに「関わる」活動であって、一般的取り決めに「作る」活動ではない。なぜならそれは、無限の可能性を有する白紙の状態から一般的取り決めに作り上げて行く活動では、決してないからである。第二に、政治という活動において秩序化されるあるひとまとまりの人間集団は、一般的取り決めに関わるやり方を共通して承認するという観点から、単一の共同体を構成する。したがってオークショットは、「承認された行動の伝統が存在しない、ひとまとまりの人間集団を想定すること……は、政治が不可能な人間集団を想定することだ」⁽¹³⁾と主張する。それゆえ彼の考えによれば、政治という活動は、既存の行動の伝統それ自体に由来する。その活動がとる形態とは、伝統の中に暗示されていることを探求し追求することで、既存の取り決めに修正し改善することのみなのである。⁽¹⁴⁾

ではオークショットは、近代合理主義を批判して伝統重視の立場を主張する際に、「伝統」をどのように理解するのか。そこで次に第二章では、ハイエクおよびマッキンタイアの伝統観と比較しながら、オークショットの伝統観に検討を加える。

第二章 行為の伝統——オークショットの伝統観

オークショットによれば、伝統とは、正確な定式化が不可能で、慣行

や実践の中で表現されそれらの中でのみ存在し得るものである。したがって彼は、伝統を教えたり学んだりすることはできず、伝えたり習得することができるのみだと主張する。彼の考えでは、伝統の習得は、習慣的にあるやり方で行為している人々と共に生活する中で、人々がこれまで行ってきた行為を観察してそれを模倣し、行為の習慣を身に付けることに始まる⁽¹⁵⁾。その意味で、伝統の習得はまさに、言語の習得と同様である⁽¹⁶⁾。

オークショットは、以上のようなかたちで習得される「行為の伝統」として、伝統を理解している⁽¹⁷⁾。この点に関して、オークショットの伝統理解はハイエクのそれと同様である。なぜならハイエクは、伝統を、①元来、明文化されたかたちで行為者に知られることなく、行為の中で遵守され尊重されており、②個々の人間は、ルールに対応する特定の行為を模倣することでルールに従って行為することを学習する、「行為ルール」のようなものとして理解しているからである⁽¹⁸⁾。もっともオークショットは、伝統の習得法について、ハイエク以上にさらに踏み込んで、「命題のかたちで定式化できる技術知は書物から学ぶことができるのに対して、伝統知を習得する唯一の方法は名人への弟子入りだ」との主張を展開している⁽¹⁹⁾。オークショット曰く、「それは、名人が伝統知を教え得るからではなく（名人にはそれは不可能である）、伝統知を絶えず実践している人間と継続的に接触していることによってのみ、伝統知を習得し得るからである。⁽²⁰⁾」そしてこの点に関しては、オークショットの考える「行為の伝統」の習得法と、マッキンタイアの考える「知的探求の伝統」の習得法との類似性が、指摘できよう⁽²¹⁾。

以上のような特徴を有する「行為の伝統」について、オークショットはさらに、以下に挙げる四つの特徴を指摘する⁽²²⁾。

第一に、それは、行為遂行の結果である。つまりそれは、人々が設計したわけでも選択したわけでもなく、人々が自ら、その行為の伝統が通用している範囲内にいることを認めてそれに同意することによって、継続的に探求され再構成されるものである。したがってもっと正確に言えば、

行為の伝統は、ひとつの行為遂行の結果ではなく、継続的に創造され常に終わることのない行為遂行の副産物として現れる。それは、人間の手による終わりなき歴史的達成物なのである。そしてオークションによれば、それがある程度の明確さと権威を得たとき、あるいは、その有用性が認められたときに初めて、それは「行為の伝統」として認められる。⁽²³⁾

第二に、行為の伝統は、行為者の実質的な選択や行為遂行を決定するものではなく、そのための条件を規定する行為枠組である。それは、実質的な行為遂行を決定し、指定し、命令するものではなく、共通の実質的な善を定義し記述するものでもない。それは、人々にいかなる共通の目的をも課さず、いかなる共通の利益をも促進しない。それは、行為者に対して、為すべき選択を教えることはできない。そうではなくそれは、行為者が自らの願望を探究して、選択を為し、行為する際に、行為遂行の結果にかかわらず、いかなる実質的な目的もなしに、同意すべき条件を示すのみである。⁽²⁴⁾

第三に、行為の伝統は、固定的で完全なものでは決してない。それは、長い間修正されないままであるということとはあり得ず、常に漸進的に変化する。もっともオークションによれば、伝統を恣意的に変化させるのは不可能である。⁽²⁵⁾

第四に、行為の伝統の内容は、消極的である。つまりそれは、しばしば、何かを遂行するというかたちだけではなく、あることを行わないとかたちで現れる。⁽²⁶⁾

以上の点に関しては、オークションの伝統観はハイエクのそれと共通している。⁽²⁷⁾なぜならハイエクは、「行為ルールとしての伝統」が有する特徴について、以下の三点を指摘するからである。第一に、伝統とは、遺伝子によって決定されるものという意味での自然と、知性の設計の産物という意味での人工との間にあり、本能と理性の間にあるものであって、「A・ファーガソンが『人間の行為の結果ではあるが、人間の設計の結果ではないもの』と述べた」⁽²⁸⁾第三の範疇に属するものである。⁽²⁹⁾第二

に、行為ルールとしての伝統は、不変ではなく進化の中で成長し発展するが、それを熟慮のうえで恣意的に変化させるのは不可能である⁽³⁰⁾。第三に、行為ルールとしての伝統の内容は、消極的である。それは、行われるべき具体的行為を指定するわけでは決してなく、特定の具体的な状況において為されてはならない行為の型を提示する。つまりそれは、特定の具体的な状況に適応される一般的な枠組を提供することで、意識的な選択が行われる選択肢の範囲を制限するだけである⁽³¹⁾。

だが同時に、オークショットとハイエクの伝統観を比較すると、次のような違いも指摘できる。

第一に、ハイエクの伝統観における大きな特徴のひとつとして、「行為ルールとしての伝統は、理性ではなく成功によって導かれる、淘汰の過程の産物だ」という主張を挙げることができる⁽³²⁾。このように「伝統とは、生き残ってきたものだ」という点を強調するハイエクの伝統観には、オークショットのそれとの違いが明確に現れている。

第二に、ハイエクは、「行為ルールとしての伝統」の抽象性・一般性を繰り返し強調する。それは、「人間の意識的思考や言語的表現に現れるずっと以前から、人間の行為を決定するパターンが存在しており、そのようなものとしての『行為ルールとしての伝統』が、明確に意識化された特定の行為を枠付けている」ということを意味する⁽³³⁾。これに対してオークショットは、「行為の伝統」の具体性・個別性にも目配りをして、次のように論ずる。オークショットによれば、行為の伝統の習得はやっかいな事柄である。なぜなら、行為の伝統に関して本質と偶然とを区別するのは不可能なので、それについての知識は、不可避免的に、その細部についての知識たらざるを得ないからである。換言すれば、行為の伝統の要点のみを知ることは、それについて何も知らないことと同じなのである。したがってオークショットの主張によると、行為の伝統を習得するためには、我々は、具体的で一貫した生活様式を、その複雑さそのままのかたちで習得しなければならない。さらに彼は、行為の伝統に関し

て我々が探し求めている知識は、局地的・限定的なものであって、決して普遍的なものではない、とも主張する。⁽³⁴⁾そしてこれらの点に関しては、オークショットの伝統観は、ハイエクのそれよりは、むしろマッキンタイアのそれに近いといえることができる。なぜならマッキンタイアは、啓蒙主義に代わる理解様式として彼自身が提示する「伝統に体现されたものとしての合理的探求という構想 (a conception of rational enquiry as embodied in a tradition)⁽³⁵⁾」の特徴について述べる際に、①実際、多様な歴史を有する多様な伝統が存在し、それゆえ、ひとつの合理性ではなく複数の合理性が存在し、また、ひとつの正義ではなく複数の正義が存在するという点と、②伝統に体现されたものとしての合理的探求という概念を、例証から離れて説明することはできない⁽³⁶⁾という点とを、指摘^{(37) (38)}するからである。

最後に、オークショットの伝統観とマッキンタイアのそれとの基本的相違について、一言触れておきたい。以上で検討してきたオークショットの「行為の伝統」に対して、マッキンタイアが主に論ずるのは、正義と実践的合理性に関する、明確に意識化され明文化された構想・主張・説明・理論としての「知的探求の伝統」である。⁽³⁹⁾このようなマッキンタイアの伝統観は、「正確な定式化が不可能で、慣行や実践の中で表現されそれらの中でのみ存在し得るもの」と捉えるオークショットの伝統観と対照的だといえることができる。⁽⁴⁰⁾

第三章 伝統の発展

前章で検討を加えた、オークショット、ハイエク、マッキンタイアの伝統観の相違は、伝統の発展をめぐる各々の議論にも大きな影響を与えている。そこで本章では、伝統の発展をめぐるオークショットの議論について、ハイエクおよびマッキンタイアの議論と比較しつつ、検討を加えたい。

オークショットは、「行為の伝統」は固定的で完全なものでは決してないと考えて、内在的批判に基づく伝統の発展を主張する。彼によると、伝統の中のある部分が、他の部分よりもゆっくりと変化することということはあり得るが、全く変化しない部分など存在し得ない。伝統の中のあらゆる部分が変化するのである。それにもかかわらずオークショットは、伝統には確かに同一性があると主張する。なぜなら、伝統のすべての部分が同時に変化することは決してなく、伝統のある部分は他の部分に足場を置いて変化するからである⁽⁴¹⁾。したがって彼の考えによれば、伝統は、変化するが全面的には動揺しないという点で安定的であるとともに、静寂ではあるが決して完全には休止しない。伝統は、長い間修正されないままであるということとはあり得ず、常に漸進的に変化する⁽⁴²⁾。

このように伝統の発展を重視しつつも、内在的批判に基づく伝統の発展を主張するという点に関しては、ハイエクも同様の主張を展開している。彼は、「行為ルールとしての伝統」は不変ではなく成長し発展すると考え、伝統の発展過程について論ずる際に次の二点に注意を促す。

第一に、ハイエクによれば、「行為ルールとしての伝統」の中に含まれるひとつひとつの内容を批判的に検討して、それを改善しようとするのは重要なことであるが、そのすべての内容あるいはその全体構造それ自体を問題にして、それらを批判し、それらを完全に放棄することは不可能である。なぜなら、伝統の中に含まれるひとつの価値観を批判的に検討してそれを改善しようとする際には、その伝統が有する他のすべての価値観に基礎を置かねばならないからである。ハイエクによると、我々は、自身の伝統に足場を置いたうえでその中に存在する問題点を内在的に批判することで、自身の立脚する伝統が有している欠陥を少しずつ改善し修正して行かねばならない⁽⁴³⁾。

第二に、ハイエクの指摘によると、「行為ルールとしての伝統」の発展過程は消極的である。つまり伝統は、状況により適合的なものを積極的に探求することによってではなく、明らかに状況適合性を失ったもの

を漸次的に排除するという消極的過程を経ることによって、発展して行くのである。⁽⁴⁴⁾

もっとも、ここで注意する必要があるのは、「オークショットの主張する内在的批判に基づく伝統の発展は、ハイエクの主張するそれと同一ではない」という点である。ハイエクは、「行為ルールとしての伝統」の発展を、自身が立脚する伝統の内在的批判とそれに基づく漸進的改善・修正に限定する。⁽⁴⁵⁾これに対してオークショットは、自身が立脚する「行為の伝統」の観点に基づいて他の社会の伝統が有する知識を吸収し、それによって自身の伝統を発展させるということにも、言及している。⁽⁴⁶⁾その背景には、「行為の伝統」は普遍的なものではなく局地的・限定的なものだと考える、彼の伝統観が存在する。つまりオークショットの議論においては、ハイエクの場合と異なり、複数の伝統の存在を認めることが可能なのである。とはいえ、「オークショットが考える他の社会における伝統の知識の吸収は、自身の伝統に立脚するものだ」という点には、十分に注意を払わなければならない。なぜなら、複数の伝統の存在を認めつつも、内在的批判に基づく——換言すれば、あくまでも自身の伝統に立脚するかたちでの——伝統の発展を主張する、以上のようなオークショットの主張に対しては、「伝統の発展をこのように理解しているかぎり、自身が立脚する伝統のすべての内容やその全体構造それ自体に問題がある場合には、およそ問題解決が不可能ではないか」との批判が投げ掛けられる可能性があるからである。

このように内在的批判に基づく伝統の発展を主張するオークショットやハイエクの議論と対照的に、内在的批判に基づく漸進的改善・修正に限定しないかたちで伝統の発展を理解するのが、マッキンタイアの議論である。マッキンタイアも、オークショットやハイエクと同様に、伝統が静的ではなく動的だということを強調し、伝統は不変ではなく成長し発展すると主張する。マッキンタイアによると、あるひとつの「知的探求の伝統」の発展は、①所与の信念がまだ問題とされていなかった段階、

②所与の信念に内在する不適切な点がいろいろと同定されたが、まだ修正されていなかった段階、③そのような不適切な点を修正してその限界を超えようとする、再定式化・再評価と新しい定式化・評価が行われる段階、の三段階に区別できる⁽⁴⁷⁾。ここで注目すべきは、マッキンタイアが、伝統の発展に関して、「所与の信念に内在する不適切な点を修正して、その限界を超えようとする」段階の存在を指摘している点である。彼の考えでは、伝統に体现されたものとしての個人の探求は、所与のものの発見・認識だけでなく、個人が立脚する伝統に関する批判的熟慮の可能性をも含み、しかもそのような批判的熟慮は、伝統の内在的批判に基づく漸進的改善・修正に限定されない⁽⁴⁸⁾。この点において、マッキンタイアの主張は、オークショットやハイエクの主張と大きく異なるのである。では、マッキンタイアが主張する、内在的批判に限定されない伝統の発展とはどのようなものか。

マッキンタイアは、伝統における衝突の要素を重視し⁽⁴⁹⁾、「伝統とは、時代を通して拡大され社会的に体现された議論(argument)である」と考える。彼によると、そのような議論における何らかの基本的一致は、二種類の衝突——伝統に外在的な批判者・敵対者との論争と、内在的・解釈的な論争——という観点から定義され、定義し直される。とりわけ、オークショットやハイエクとの比較で注目すべきは、①内在的・解釈的な論争も、時には、伝統における基本的一致の基礎を破壊するかもしれないという主張と、②伝統に外在的な批判者・敵対者との論争によっても、伝統における何らかの基本的一致が定義され、定義し直され得るという主張の、二つである。なぜならこれらの主張には、内在的批判に限定されない伝統の発展という、マッキンタイアの伝統論の特徴が明確に現れているからである⁽⁵⁰⁾。彼は、これらの主張の詳細を、伝統間比較論で論じている。

マッキンタイアは、伝統間比較論を展開するに際して、まず始めに「実際、多様な歴史を有する多様な伝統が存在する」と指摘して、伝統

の複数性・多様性を明確に認める⁽⁵¹⁾。そのうえで彼は、競争し対抗している両立不可能な二つの伝統が相互に対決している場合の対応として、ある伝統の枠内でその伝統に基礎を置くかたちで展開されつつも、同時にその伝統に内在する問題点・矛盾を突破・超越してその伝統を再構成するような探求の方法——彼はこれを「伝統構成的探求 (a tradition-constituted and tradition-constitutive enquiry)」と名付ける——に基づく解決法を提示する⁽⁵²⁾。

マッキンタイアによると、伝統構成的探求に基づく伝統間論争は、次の二段階で進行する。まず第一段階では、各々の伝統の擁護者は、自身が擁護する伝統の観点から競争相手の伝統の主張を特徴づけ、自身の伝統の中心的見解と両立しない、競争相手の主張を拒絶するための根拠を明らかにする。これに対して第二段階では、各々の伝統の擁護者は、「知的探求を行う際に自身の伝統の基準に従っているかぎり、自身の伝統が特定の領域において解決不可能な二律背反を生み出すことになってしまい、むしろ競争相手の伝統のほうが、自身の伝統の失敗・欠陥を、自身の伝統以上に適切に説明できるのではないか」と考える。

ここでマッキンタイアは、伝統間論争の第二段階で見られるような状況にすべての伝統が陥る可能性があるとは指摘して、これを「認識論的危機」と名付ける。先に注目した、「①内在的・解釈的な論争も、時には、伝統における基本的一致の基礎を破壊するかもしれない」という彼の主張は、伝統が認識論的危機に陥る場合を想定していると考えられる⁽⁵³⁾。このような認識論的危機の解決法として、マッキンタイアは、先に注目した「②伝統に外在的な批判者・敵対者との論争によっても、伝統における何らかの基本的一致が定義され、定義し直され得る」という考え方を提示する。彼によれば、認識論的危機に陥っている伝統の擁護者は、「競争相手の伝統のほうが、自身の伝統の失敗・欠陥を、自身の伝統以上に適切に説明できる」と考えて、競争相手の伝統に基づく新たな概念を発明・発見し、新たな理論を形成することによって、認識論的危機を

解決できるのである。⁽⁵⁴⁾

むすびにかえて

以上本稿では、「オークショット、ハイエク、マッキンタイアの議論は、『伝統』重視の立場に基づく啓蒙主義的合理主義批判という、重要な共通点を有する」との問題設定に基づいて、オークショットの近代合理主義批判・伝統観・伝統の発展論をハイエクおよびマッキンタイアの議論と比較し、オークショットの伝統論の特徴を明らかにしてきた。最後に、このようなオークショットの伝統論が有する魅力を三点指摘して、本稿を締め括りたい。

第一に、オークショットの「行為の伝統」という伝統観は、基本的には、ハイエクの「行為ルールとしての伝統」という伝統観と共通しており、「知的探求の伝統」というマッキンタイアの伝統観と対照的である。⁽⁵⁵⁾だがオークショットの場合、ハイエク以上にさらに踏み込んで「伝統の唯一の習得法としての名人への弟子入り」という主張を展開することによって、ハイエクと異なり、マッキンタイアの「知的探求の伝統」の習得法との共通性を指摘することが可能となる。

第二に、オークショットは、伝統の抽象性・一般性を指摘するだけでなく、その具体性・個別性や局地性・限定性にも目配りをする。そのような彼の伝統観と比較することによって、伝統の抽象性・一般性を繰り返し強調するハイエクの伝統観や、伝統の具体性・個別性・局地性・限定性を主張するマッキンタイアの伝統観が有する特徴と問題点を、一層明確化することができる。

第三に、伝統の発展論に関するオークショットの伝統論の魅力について。ハイエクの場合、いわゆるアングロ・サクソン型の古典的自由主義を基礎で支える「行為ルールとしての伝統」だけを伝統として想定し、伝統の発展を自身が立脚する伝統の内在的批判とそれに基づく漸進的改善・修正に限定する。これに対してマッキンタイアの場合、「知的探求

の伝統」が複数存在することを明確に認めたうえで、伝統間比較論を展開する。したがってマッキンタイアの「知的探求の伝統」論と比較した場合に、ハイエクの「行為ルールとしての伝統」論に対しては、「伝統の内容が社会によって異なる可能性を認めたうえで、複数の伝統間の比較という問題に答えることが、不可能ではないか」との批判が投げ掛けられるかもしれない。だがこのような批判に対しては、「マッキンタイアとハイエクでは、そもそも伝統観が全く異なるのだから、マッキンタイアの『知的探求の伝統』論の観点に基づく上述のハイエク批判は、完全に的を外している」という、正当な反論が提示され得る。ここで注目すべきなのが、オークショットの「行為の伝統」論である。なぜならオークショットは、ハイエクと多くの点で共通する伝統観を提示しながら、同時に、伝統の内容が社会によって異なる可能性を認めたうえで、自身が立脚する伝統の観点に基づいて他の社会における伝統の知識を吸収し、それによって自身の伝統を発展させるということに言及しているからである。それゆえ筆者の考えによれば、ハイエクの「行為ルールとしての伝統」論とマッキンタイアの「知的探求の伝統」論との間にオークショットの「行為の伝統」論を挟み込むことによって、「行為ルールとしての伝統」⁽⁵⁶⁾に関する伝統間比較論を展開することが可能となるのである。

(1) cf. P. Franco, *The Political Philosophy of Michael Oakeshott*, Yale U.P., 1990, p. 1

(2) もっとも、例えばM・サンデルは、オークショットの議論を共同体論に分類している。M. J. Sandel, "Introduction", in *do.* (ed.), *Liberalism and Its Critics*, New York U.P., 1984, pp.10~1. だがこのようなサンデルの分類に対しては、井上達夫、中金聡、渡辺幹雄が適切な批判を加えている。井上達夫『共生の作法——会話としての正義——』創文社、1986年、248頁、中金聡『オークショットの政治哲学』早稲田大学出版部、1995年、283~4頁(注20)、渡辺幹雄『『バブル』としてのリベラールコミュニタリアン論争——Michael Sandel, *Liberalism and the Limits of Justice*, 1982について』(『山口経済学雑誌』第54巻第2号、2005年) 62~3頁。

なおオークショットの議論に関しては、いわゆるリベラル・コミュニタリアン論争における両者の限界を超越するものだという指摘も存在する。Franco, *op.cit.*, pp.230～6. ちなみに、F・A・ハイエクの議論に関するこれと同様の指摘については、H. H. Gissurarson, *Hayek's Conservative Liberalism*, Garland Publishing, 1987, pp. 6～7, pp.10～5, pp.163～4, C. Kukathas, *Hayek and Modern Liberalism*, Oxford U.P., 1989, p.85, pp.215～28を参照せよ。

- (3) 拙稿「啓蒙主義的合理主義批判の二つのかたち(一)——ハイエクの『行為ルールとしての伝統』とマッキンタイアの『知的探求の伝統』——」(『法学論叢』第155巻第3号, 2004年) 93頁, 同「伝統論についての一考察——F・A・ハイエクとA・マッキンタイアの比較検討——」(日本法哲学会編『リバタリアニズムと法理論・法哲学年報2004』有斐閣, 2005年) 128～9頁を参照。
- (4) ハイエクの構成主義批判およびマッキンタイアの啓蒙主義批判の詳細については、前掲拙稿「啓蒙主義的合理主義批判の二つのかたち(一)」94～5頁を参照。
- (5) M. Oakeshott, *Rationalism in politics and other essays*, New and expanded edition, Liberty Fund, 1991 (以下, RP), pp. 5～9 [嶋津格・森村進他訳『政治における合理主義』勁草書房, 1988年, 1～5頁(澁谷浩・奥村大作・添谷育志・的射場敬一訳『保守的であること——政治的合理主義批判——』昭和堂, 1988年, 3～8頁)]
- (6) オークショットの指摘によれば、近代合理主義の最も大きな源泉と考えられるのが、人間の知識についてのこのような教義なのである。*ibid.*, p. 11 [邦訳8頁(邦訳11～2頁)]
- (7) オークショット曰く、「自力で自己を形成した人間は、決して文字どおり自力で自己を形成したわけではなく、ある種の社会と自覚されざる大いなる遺産とに依存しているのと同様に、技術知は、実際、自己完結的では決してない。」(*ibid.*, p.17 [邦訳13頁(邦訳18頁)])
- (8) cf. *ibid.*, pp.11～7 [邦訳8～14頁(邦訳11～8頁)]
- (9) オークショット曰く、「人間はこのようには行動しない。というのも人間は、このようには行動できないからである。」(*ibid.*, p.108 [邦訳101頁(邦訳93～4頁)])
- (10) cf. *ibid.*, pp.99～131 [邦訳91～127頁(邦訳81～123頁)]
- (11) オークショット曰く、「現在の日常生活の状況は、自身を行動のルールに意識的に適応させることによって、あるいは、道徳的理想の表現として認識されている行為によってではなく、特定の行動の習慣に従って行為す

- ることによって、満たされている。」(*ibid.*, p.467 [邦訳70頁(邦訳53頁)])
- (12) cf. *ibid.*, pp.465~87 [邦訳67~90頁(邦訳49~79頁)]. もっともオークショットによれば、ここで提示された二つの道徳的生活の形態——すなわち、近代合理主義が想定する「理想の道徳」と、これと対照的な「習慣あるいは伝統の道徳」——は、道徳的生活についての二つの理念的な極論であり、したがって実際上の我々の道徳の形態は、このような二つの理念的な極論の混合形態である。そして彼は、そのような混合形態について、「習慣あるいは伝統の道徳」が支配的な混合形態においては、道徳的生活は、行動と理想の追求との間の混乱から免れることができるが、「理想の道徳」が支配的な混合形態においては、その構成要素の間での永続的な緊張に苦しむこととなる、との評価を下している。
- (13) *ibid.*, p.56 [邦訳143頁]
- (14) cf. *ibid.*, pp.43~69 [邦訳128~60頁], esp. pp.44~5, pp.56~8 [邦訳129~30頁, 143~5頁]. したがってオークショットの指摘によれば、「政治とは、純粹に経験的な活動だ」という理解も、「政治とは、独立して前もって熟慮したイデオロギー——それは、ひとつの抽象的原理、あるいは、関連する一連の複数の抽象的原理のことである——に導かれて、社会の取り決めに関わる活動だ」という理解も、ともに誤りである。*ibid.*, pp.46~56 [邦訳132~43頁]
- (15) したがってオークショットの主張によると、伝統の習得が開始された時点を確認することは不可能である。*ibid.*, pp.62~3 [邦訳149~50頁]
- (16) *ibid.*, pp.11~7, pp.62~3, pp.119~21, pp.468~9 [邦訳8~14頁(邦訳11~8頁), 70~1頁(54~6頁), 113~6頁(107~11頁), 149~50頁], M. Oakeshott, *On Human Conduct*, Oxford U.P., 1975 (以下, HC), p.120 [野田裕久訳『市民状態とは何か』木鐸社, 1993年, 24~5頁]
- なお、以上のようなオークショットの伝統理解の背景には、「あることのやり方についての知識 (knowledge how)」と「あることの内容についての知識 (knowledge that)」の区別が存在する。RP, pp.12~4 [邦訳9~10頁(邦訳13~4頁)]. そして、この区別を支えているのが「暗黙知 (tacit knowing)」という発想である。暗黙知については、M. Polanyi, *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, Paperback edition, The University of Chicago Press, 1974 [長尾史郎訳『個人的知識——脱批判哲学をめざして』ハーベスト社, 1985年], *do.*, *The Tacit Dimension*, Peter Smith, 1983 [佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店, 1980年] を参照。
- (17) なお、オークショットの伝統論を検討する際には、「彼は、『人間行為論』

(HC)においては、『伝統(tradition)』という言葉の代わりに『慣行(practice)』という言葉を使用している」という点に、注意が必要である。M. Oakeshott, "On Misunderstanding Human Conduct: A Reply to My Critics", in *Political Theory*, Vol. 4, No. 3, 1976, p.364. cf. Franco, *supra note 1*, p. 8, pp.171~2

本稿では、『人間行為論』におけるオークショットの「慣行」という表現を、すべて「伝統」と置き換えて、論述を展開している。

- (18) cf. F. A. Hayek, *The Constitution of Liberty*, The University of Chicago Press, 1960 (以下, CL), Ch.10 [気賀健三／古賀勝次郎訳『自由と法——自由の条件Ⅱ 新装版ハイエク全集第6巻』春秋社, 1997年, 第10章], *do.*, *Law, Legislation and Liberty: A new statement of the liberal principles of justice and political economy*, Routledge, 1993, Volume 1 (以下, LLL-1), pp.17~9, Ch. 4 [矢島鈞次／水吉俊彦訳『ルールと秩序——法と立法と自由Ⅰ 新装版ハイエク全集第8巻』春秋社, 1998年, 26~9頁, 第4章]. なお, ハイエクのいう「行為ルールとしての伝統」とは, 個々の行為ルールひとつひとつのことではなく, 行為ルールの全体的な秩序のことだという点には, 注意が必要である。cf. F. A. Hayek, *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, Routledge & Kegan Paul, 1967 (以下, S), pp.66~81

ちなみにハイエクも, オークショット同様, このような伝統理解の背景としての「あることのやり方についての知識」と「あることの内容についての知識」との区別と, この区別を支える「暗黙知」という発想とに, 言及している。F. A. Hayek, *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, Routledge, 1990 (以下, NS), p.38, p.81, LLL-1, p.76 [邦訳101頁], CL, pp.25~6 [気賀健三／古賀勝次郎訳『ハイエク全集第5巻 自由の条件Ⅰ——自由の価値』春秋社, 1986年, 42~3頁]

- (19) RP, p.15 [邦訳11~2頁(邦訳15~6頁)]. cf. HC, p.120 [邦訳24~5頁], Polanyi, *supra note (16)*, *Personal Knowledge*, pp.53~4 [邦訳49~50頁]
- (20) RP, p.15 [邦訳11頁(邦訳16頁)]
- (21) cf. A. MacIntyre, *Three Rival Versions of Moral Enquiry: Encyclopedia, Genealogy, and Tradition*, University of Notre Dame Press, 1990, pp.60~3, pp.65~6. なお, マッキンタイアの「知的探求の伝統」の詳細については, 拙稿前掲注(3)「啓蒙主義的合理主義批判の二つのかたち(一)」96~8頁を参照。

- (22) なおオークショットは、「行為の伝統」の具体例として、イギリスのコモン・ロー、いわゆるイギリス憲法、東洋的専制、封建制、キリスト教、「啓蒙主義」、騎士道精神、近代物理学、造船術、バロック建築、クリケットのゲームといったものを挙げている。RP, p.61, n. 8 [邦訳159頁], HC, p.99, n. 1
- (23) HC, p.56, p.63, p.86, pp.182~3 [邦訳109~110頁]. オークショットの指摘によると、「行為の伝統」が有する権威は、一回限りの授權によって得ることはできず、人々が継続的にその権威を認めることによってのみ得ることができる。彼はこのことを、クリケットのルールに関してメリルボン・クリケット・クラブが得た権威との類比で説明する。彼曰く、「メリルボン・クリケット・クラブは私的な一クラブであり、1787年に設立されたときには、他の多くのクリケット・クラブとほとんど違いはなかった。だが、一世紀ほどを経るうちに、このクラブはクリケットのルールの管理人として認められるようになり、ルール変更のためには必ずこのクラブの承認を必要とする、(いわば) 正式記録裁判所として認められるようになった。これが権威の獲得であった。……このクラブがこのような権威を維持しているのは、このクラブが権威を有しているとみなす人々が、絶えずそのことを認めているからである。それゆえ、そのように認められることがなくなれば、この権威は消滅するだろう。」*ibid.*, pp.153~4 [邦訳71頁, 115頁]
- (24) *ibid.*, p.55, p.58, pp.59~60, p.86, pp.119~21, p.182 [邦訳23~5頁, 109頁]
- (25) RP, p.61 [邦訳148~9頁]
- (26) *ibid.*, pp.467~8 [邦訳70頁 (邦訳53~4頁)]
- (27) なお、オークショットが「行為の伝統」という伝統観を示すのに対して、ハイエクは「行為ルールとしての伝統」という伝統観を提示するが、これは、両者の伝統観そのものの違いではなく、両者のルール観の違いに由来する。というのもオークショットは、ハイエクと対照的に、ルールを限定的に理解して、「ルールとは、正確に定式化されたものだ」と考えるからである。*ibid.*, pp.12~5, pp.467~9 [邦訳8~11頁 (邦訳12~5頁), 70~2頁 (53~6頁)], HC, pp.66~7, pp.119~21 [邦訳23~5頁]
- (28) LLL-1, p.20 [邦訳30頁]
- (29) cf. F. A. Hayek, *The Fatal Conceit : The Errors of Socialism*, Routledge, 1988 (以下, FC), pp.21~2, pp.143~4, Hayek, *Law, Legislation and Liberty*, Volume 3 (以下, LLL-3), Epilogue [渡部茂訳『自由人の政治的秩序——法と立法と自由Ⅲ 新装版ハイエク全集第

10巻』春秋社, 1998年, 終章], LLL- 1, p.20 [邦訳30頁]

- (30) FC, p.69, p.144, LLL- 3, p.166 [邦訳231頁]
- (31) S, p.56, NS, p. 8
- (32) cf. FC, p. 6, LLL- 3, Epilogue [邦訳終章]
- (33) cf. LLL- 1, pp.29~30 [邦訳42~ 3 頁], NS, pp.35~49
- (34) RP, pp.61~ 2 [邦訳148~ 9 頁]
- (35) A. MacIntyre, *Whose Justice? Which Rationality?*, University of Notre Dame Press, 1988 (以下, WJWR), p. 7
- (36) それゆえマッキンタイアは, 伝統に体现されたものとしての合理的探求という概念を例証するために, アリストテレス主義・アウグスティヌス主義的キリスト教・スコットランド啓蒙主義・近代リベラリズムという四つの伝統を検討する。 *ibid.*, p.10
- (37) *ibid.*, pp. 7 ~11, esp. pp. 9 ~10
- (38) なお, ここで指摘したオークショットとハイエクの伝統観の違いに関連するものとして, 『政治における合理主義』所収の論文「政治における合理主義」の中での, オークショットのハイエク批判がある。RP, pp.25~ 7 [邦訳21~ 2 頁 (邦訳27~ 9 頁)]. そこにおいてオークショットは, ハイエクの『隷従への道』(F. A. Hayek, *The Road to Serfdom*, Routledge, 1991 [西山千明訳『隷属への道』春秋社, 1992年])での論述に見受けられる体系性に対して, 「あらゆる計画化に反対する計画は, あらゆる計画化に賛成するよりはましかもしれないが, やはりそれは, あらゆる計画化に賛成するのと同じの様式の政治に属している」(RP, p.26 [邦訳22頁 (邦訳29頁)])と批判する。もっとも, このようなオークショットのハイエク批判について, H・H・ギスラーソンは適切にも, 「オークショットは, ハイエクが行う基本的区別である, 制度と伝統の自生的な成長に対する障害を取り除くことと, 予め考えておいた計画に従って社会を再構成しようとする事との区別を, 無視している」と指摘している。Gissurarson, *supra note* (2), pp.119~22
- (39) WJWR, pp.349~50, pp.389~91
- (40) とりわけ, オークショットが「行為の伝統は特定の行為——その中には, 明文化された構想も含まれる——を枠付ける」ということを指摘する点に着目すれば, オークショットの伝統観とマッキンタイアのそれとの違いは一層明確になる。
- (41) それゆえオークショット曰く, 「伝統の原理とは, 連続性の原理である。」RP, p.61 [邦訳148~ 9 頁]
- (42) cf. *ibid.*, p.61, pp.470~ 1 [邦訳72~ 4 頁 (邦訳57~ 9 頁), 148~ 9

頁], HC, p.120 [邦訳24頁]. それゆえオークショットは, 第一章で述べたように, このような伝統に基礎を置く活動の具体例である政治という活動を, 「あるひとまとまりの人間集団を秩序化する一般的取り決めを『作る』活動ではなく, それに『関わる』活動だ」と捉えて, 「政治という活動は, 無限の可能性を有する白紙状態から一般的取り決めを作り上げて行く活動では決してなく, 既存の一般的取り決めを少しずつ修正し改善して行くだけの活動だ」と主張する。RP, pp.44~5, pp.56~8 [邦訳129~30頁, 143~5頁]. しかしだからといって, 「伝統を恣意的に変化させることができる, ということにはならない」という点に, オークショットは注意を喚起する。ibid., p.61 [邦訳149頁].

- (43) FC, p.69, NS, pp.18~20, LLL-3, p.166 [邦訳231頁]. cf. K. Popper, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, Routledge, 2002, Ch. 4 [藤本隆志/石垣壽郎/森博訳『推論と反駁——科学的知識の発展』法政大学出版局, 1980年, 第4章]. なおこの点についてハイエクは, 具体的には, ルールの発展過程を例にとって説明を加えている。詳細は, 拙稿前掲注(3)「啓蒙主義的合理主義批判の二つのかたち(一)」101頁を参照。
- (44) cf. Hayek, *Law, Legislation and Liberty*, Volume 2, pp.38~42 [篠塚慎吾訳『社会正義の幻想——法と立法と自由Ⅱ 新装版ハイエク全集第9巻』春秋社, 1998年, 58~63頁]
- (45) ハイエクが伝統の発展についてこのように考える背景には, 「構成主義対『伝統』に基礎を置く自由主義」という, 彼の基本的な対立構図が存在する。cf. F. A. Hayek, *Individualism and Economic Order*, The University of Chicago Press, 1980, Ch. I [嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序 新装版ハイエク全集第3巻』春秋社, 1997年, I], CL, Ch. 4 [邦訳第4章], S, Ch.11, NS, Ch. 9. つまりハイエクの議論においては, いわゆるアングロ・サクソン型の古典的自由主義を基礎で支える「行為ルールとしての伝統」だけが, 伝統として想定されているのである。この点について詳細は, 拙稿「自由主義と伝統の両立可能性に関する一考察——F・A・ハイエクとM・オークショットの比較検討——」(『中京法学』第40巻第3・4合併号, 2006年刊行予定)で論ずる。
- (46) RP, p.59, pp.64~5 [邦訳146~7頁, 151~2頁]
- (47) WJWR, pp.354~5
- (48) マッキンタイア曰く, 「推論はすべて, 何らかの伝統的な思考様式の文脈内で行われ, 批判と考案(invention)を通して, その伝統の中でこれまで推論されてきたことの限界を超越する。」(A. MacIntyre, *After Virtue*

: *A Study in Moral Theory*, Second Edition, University of Notre Dame Press, 1984 (以下, AV), p.222 [篠崎榮訳『美德なき時代』みすず書房, 1993年, 272頁]

- (49) cf. WJWR, p.12, AV, p.221~2 [邦訳272~3頁]. なおP・フランコの指摘によれば, 伝統における衝突の要素を強調する点においてマッキンタイアとオークショットは共通しており, 「伝統は, 必然的で安定的なもの」と捉えるE・バークと対照的である。Franco, *supra* note (1), p.140. オークショットが, 伝統における衝突の要素を重視しているという点については, RP, pp.471~2 [邦訳74~5頁(邦訳59~60頁)]を参照。
- (50) WJWR, p.12
- (51) *ibid.*, p. 9
- (52) 以下の論述に際しては, *ibid.*, Ch.X, esp. pp.166~7, Ch.XVIII, esp. pp.361~7を参照した。
- (53) したがってマッキンタイアによれば, 伝統構成的探求に基づく伝統間比較論を展開する際に最も重要なのは, 認識論的危機をどのように解決すべきかという問題である。
- (54) 内在的批判に限定されない伝統の発展を主張する, マッキンタイアの議論の詳細については, 拙稿前掲注(3)「啓蒙主義的合理主義批判の二つのかたち(一)」98~102頁および拙稿「啓蒙主義的合理主義批判の二つのかたち(二)・完——ハイエクの『行為ルールとしての伝統』とマッキンタイアの『知的探求の伝統』——」(『法学論叢』第155巻第5号, 2004年)107~10頁を参照。
- (55) 第二章で具体的に指摘した点をまとめるならば, 「伝統とは, 正確な定式化が不可能で, 慣行や実践の中で表現されそれらの中でのみ存在し得るものだ」という伝統理解や, 伝統が有する四つの特徴についての理解——伝統とは, ①行為遂行の結果であり, ②行為枠組であって, ③固定的で完全なものでは決してなく, ④内容が消極的である——に関して, オークショットの伝統観はハイエクのそれと共通しており, 正義と実践的合理性に関する明確に意識化され明文化された構想・主張・説明・理論としての「知的探求の伝統」を主に論ずる, マッキンタイアの伝統観と対照的である。
- (56) もっともその際には, アングロ・サクソン型の古典的自由主義を擁護するハイエク自身の議論枠組からは, 少し距離をとらなければならない。なお, 「行為ルールとしての伝統」という伝統観を採用することと, アングロ・サクソン型の古典的自由主義を擁護することとは, 別個の問題だという点については, 拙稿前掲注(45)を参照。